

川崎大治民話選

日本の
ふしぎ話



川崎大治（かわさき・だいじ）

1902年北海道生まれ。早大卒業後プロレタリア児童文学運動に参加。代表作に「川をわたる歌声」がある。また口演童話・紙芝居活動でねりあげられた語り口は、「日本のわらい話」「日本のおばけ話」など、定評ある川崎民話を生みだした。日本児童文学者協会々員。

山崎外郷（やまざき・がいきょう）

1913年福井県生まれ。新日本画運動、ホクト社に参加。戦時中一時画業を放棄。戦後、東宝映画に入社、職場美術書記長をへて、さし絵の世界にはいる。とくに時代もの、中国ものでユニークな境地を開拓。日本美術会・児童出版美術家連盟会員。1971年3月死去

日本のふしぎ話

● 昭和46年3月20日初版発行
昭和49年10月20日13版発行

著者——川崎大治

協力——松本新八郎

え——山崎外郷

発行所—株式会社 童心社

東京都新宿区三栄町22 TEL (357)4181(代表)

振替——東京75504

表紙デザイン——山崎農

製版—道野製版所・印刷—春田印刷所

表紙印刷—株式会社サン印刷所

製本—東京美術紙工事業協同組合

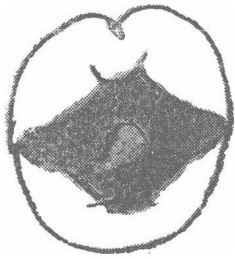


日本のふしぎ話

川崎大治民話選

●協力―松本新八郎

●え―山崎外郷



はじめのことば

川崎大治

さあ、おもしろい本ができました。わたしたちの祖先が、ながいあいだ語りつたえてきた日本のふしぎなお話が、いっぱいつまっています。

お話のなかに出てくるのは、幻術使いや、むかしの木こり、大工、百姓、町人、さむらい、そのほか、おおせいの人物や、きつね、たぬき、さる、ねこ、むじなに大蛇にヒキガエルなど、たくさん動物ばかりではありません。鬼も出ます。てんぐも出ます。妖怪もあらわれます。いいえ、それどころか、木や石や花やとうろう、まくらやようじやもぐさ、までがいのちをあたえられ、みなそれぞれの個性を生かして大活躍をします。そして、みなさんをびっくりさせたり、よろこばせたり、美しいなみだをながせたり、ときには、こわい思ひもさせたりします。

どのお話も、みんなふしぎではありませんが、ただ、ふしぎというだけではありません。ひとつひとつのお話のなかに、あなたの心をそだて、あなたが、これから生きぬいていくために必要な、なにかが、かならずやっています。

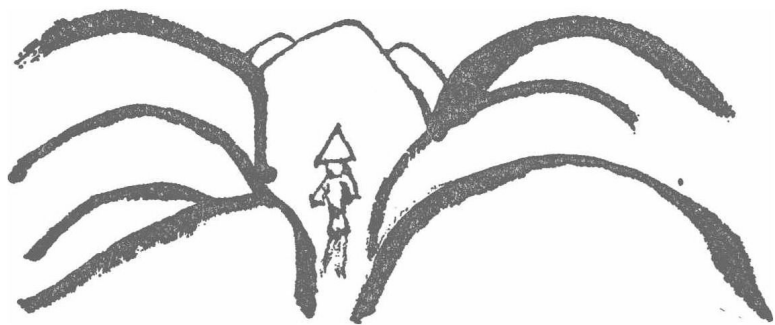
この本の絵を、じっくりあじわってください。解説を、しっかり読んでください。絵と解説とお話とは、あなたの心の中で一つにとけて、この本は、きっと、あなたの生涯に、わすれることのできない本になるでしょう。

もくじ

うばが池 いけ の一本やなぎ	10
ぼたんの花と若者 わかもの	16
百姓 ひやくしやう じいさんとてんぐ	22
くもになったおひめさま	23
こまと珍念 ちんねん	33
どっちもとりそこね	43
かっぱの妙薬 みょうやく	46
どくろのお経 きやう	53
島 しま の合戦 かっせん	59
私たちの友情 ゆうじやう	69
たばこのおかげ	72



やもりのくぎ	78
石の下のちゃん	80
飛んでいくもち	84
図版 富士山	86
大工とねこ	88
花散る下の墓	91
さかな売りときつね	98
茶店のいたずら者	105
術を使う果心居士	109
一、お能けんぶつ	109
二、欲のふかい金貸し	112
三、武芸者と腕くらべ	114
四、死んだ妻のすがた	119
五、地獄の絵図	124



六、消えていった果心居士……………129

古い木まくら……………132

お経をよむ木仏……………136

ぼたもちばけもん……………140

妖怪家族……………146

家宝の皿……………150

おこった石どうろう……………154

図版 藪の中……………162

にぎりめしと山伏……………164

旅は道づれ……………170

月夜の飛脚……………174

知らさぬが仏……………180

手を貸した人……………186



めいしん秘密の法 ひみつほう	190
木こりの修練 しゅれん	196
ピツカリコ石.....	201
越後の兄弟 えちごきょうだい	210
ゆうれいの黒髪 くろかみ	220
水中に見る妻 つま	227
もぐさのききめ.....	232
こがねのつば.....	235
小さな獺犬 りようけん	241
ちんちん しばかま.....	246
解説 かいせつ 松本新八郎.....	252





表紙・カット・さしえ
表紙文字・レイアウト

山崎外郷
山崎 晨

日本のふしぎな話



うばが池の一本やなぎ

むかし、むかしナ。

ある村に、久作きゅうさくというて、貧乏びんぼうな百姓ひゃくしょうがおった。じぶんの土地とちというたら、ねこのひたいほども持っておらん。田はたけも畑はたけも、みんな地主じぬしさまに借りてつくっておった。

さて、ある年のことじゃ。

秋のとりいれがすんで、地主じぬしさまへの年貢ねんぐも、どうやらおさめた朝。
久作きゅうさくのとつあまが、ほっくり死しんでもうた。

「ああ、とつあま。長いこと、はたらいてもろうたに、なんのたのしみもさせんで死なしてしもうて……。ゆるしてください。ゆるしてください。」

久作きゅうさくは、つめたくなつたとつあまにすがりついて、泣ないたワ、泣ないたワ。

でもナ。いつまでも泣ないてばかりはおられん。まず、葬式そうしきを出ださにや……。

村むらのもんが、集あつまって、なにかと、久作きゅうさくに手つどうてくれた。米こめや、野菜やさいなども、み

んなで持ちよつてくれたし、煮たきを手つだう女しゅうもきた。

「だが、こまつた。みんなにふるまうぜんとわんがない。すくなくみても十人前……。
買おうにも金はなし、地主さまのところへいつて借りるのも、氣づまりじゃ。ああ、ど
うしたらよからう。」

久作が、思案にくれて、家の前にぼんやり立っておると、

「もし、もし。」

とつぜん、耳もとで声がした。びっくりして顔をあげると、白いひげを胸までたらし
た、品のいいじいさまがひとり、立っておる。

「どうなされたな。えろう、こまつたごようすじゃが……。」

やさしくたずねられて、

「はい、まことにおはすかしいことですが、おとむらいに使うぜんもわんもないもんで、
思案にくれております。」

と、正直にいうた。

すると、じいさまは、まるで、死んだおっかさんのような、やさしい目で、じーっと
久作を見ておったが、

「そうかい。おまえさんのようなはたらきもんが、そんなことでこまっておるのか。それなら、あの、うばが池いけのふちに、大きなしだれやなぎが一本あるじゃろう。あのやなぎの木に、たのんでみるがよい。おまえさんがいるだけの、ぜんとわんを、きつと貸かしてくださるじゃろう。」

いうと、はや、じいさまのすがたは、見えんようになってしもうた。

(ふしぎなこともあるもんだわい。)

と、思ったが、さっそく、久作きゅうさくはうばが池いけの一本やなぎのところへやってきた。そして、両手りょうてをついて、たのんだ。

「どうぞ、おぜんとおわんを、十人分ふんだけ貸かしてください。」

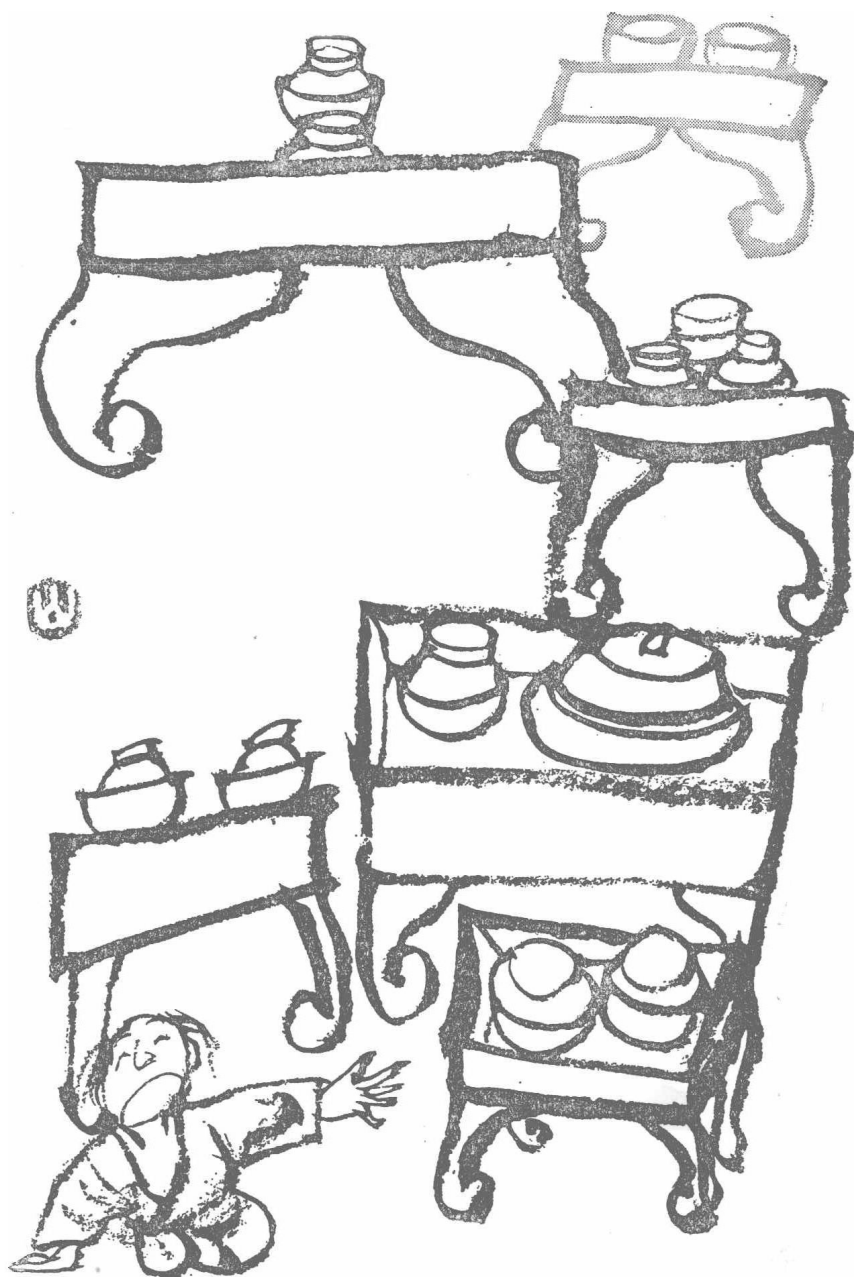
すると、風もふかんのに、しだれやなぎの糸がサーッとゆれて、どこからか、「日が暮くれたら、とりにくるがよい。」

と、いう声が聞こえた。

久作は、日が暮くれるのを待ちかねて、一本やなぎのところへやってきたワ。

「あーりや、ありや。これは、どうじゃ。」

たのんだとおり、大きなやなぎの下に、ちゃんと、おぜんとおわんが十人分ふんそろって



うばが池の一本やなぎ

おる。しかも、四つ足の高いおぜん、ふたのついたおわん、地主さんの家にもいような、ぬりもみごとな、りっぱな品じやった。

「それでは、えんりよのう、お借りもうします。」

久作は、家にそれをはこんだ。

葬式をすませると、村の人たちへのおふるまいを、借りてきたりっぱなおぜんとおわんで、みんなに食べてもらうた。

久作は、おぜんとおわんを、やなぎの下へ持つてきて、

「おかげさまで、なにもかも、とどこおりなくすませることができました。」

と、両手をつき、頭をひくうさげ、ていねいに、お礼をのべて家にかえた。

久作は、つぎの朝はよう、やなぎの下にいつてみたが、おぜんとおわんは、はや、かげも形もなかった。

さあ、それからというものの、貧乏な百姓しゅうは、おいらいごとや、おとむらいのときは、うばが池の一本やなぎさまのところへ、よう、いったもんじゃ。

そして十人分なら十人分、二十人分なら二十人分、「お借りもうしとうございます。」と、おたのみしては、借りてきた。だいじに使うて、用がすめば、きちんと返しておい

たもんじゃ。そして、「ぜん貸しやなぎさま」というてナ。みんなでやなぎの木をだいにしておったワ。

ところが、あるとき。

ひとりの男が、三十人分のおぜんとおわんを貸してもらうた。この男は、返すだんになつて、どうも、のこらず返してしまふのがおしゆうてならん。

（なあに、ひとり分ぐらいは、よかるう。）

と、二十九人分だけ返しておいたワ。そして、人には、

「おれは、ちゃんと、のこらず返しておいたぞ。」

と、すましておった。

ところが、それからというものナ、村のだれがいつても、おぜんやおわんを、ただのひとり分も、貸してはもらえんようになったということじゃ。